ヴィクトリア朝小説における臨終場面

川崎明子

ヴィクトリア朝小説群における臨終場面を、フィリップ・アリエスのいう「美しい死」（beautiful death）を一つの基準として吟味し、その多数の変奏を確認することで、最終的に、一見「美しい」とは思われないテスの刑死までもが、その一変奏であることを提示したい。

1. 死に対する態度の変遷概観

アリエスやミシェル・ヴォヴェルらフランスの歴史家が提示した、ヨーロッパにおける死に対する心性の変遷を、中世から 20 世紀まで概観し、ヴィクトリア朝の死に対する態度を歴史的に位置づける。

❶「飼いならされた死」（The Tame Death）：古代から 12 世紀頃まで

死は、誰にでも等しく訪れる集団的運命としての「我らの死」であり、忌避も称賛もされない。自分の死を悟った人は、「病の床に伏して」死を待ち、自ら自分の死という公の儀式を、過度の感情なしに司った。

❷「己の死」（The Death of the Self）：12 世紀頃から

人が個性化するにつれ、死も個性化する。それまで死者は安らかに眠り、キリスト再臨時に天国で目覚めるとされたが、12 世紀以降は天国に行く人と地獄に行く人が分離し始め、13 世紀には最後の審判の観念が強まる。〈よい死〉とは、「病の床に臥して」準備を整え、神と和解する死である。模範的なのは聖人たちの死で、最上の死は聖母マリアの「眠り」である。15 世紀の『往生術』（*Ars moriendi*）が示すように、人の救済または破滅は、臨終の際の瀕死者の態度により決定する。死ぬ瞬間に全生涯を見直し、死ぬ瞬間の態度が人生の結論を出すことから、死は、人が己を最も明確に知る場となった。

❸「遠くて近い死」（Remote and Imminent Death）：ルネサンス期以降

死は遠くにあるがゆえに人を引きつけ、エロスと結びつき非合理で残酷なものになる。死は快楽をもたらし、死体が欲望の的になる。絶対王政の時代に、「私は日々死に近づく」という恐怖が社会統制に利用され、地獄への不安にみちた司牧がなされる。〈よい死〉は死ぬ瞬間に決まるのではなく、〈よい生〉の帰結へと変化する。18 世紀後半、墓が修道院や教会の外に作られ始め、都市霊園が出現し、墓地は家族の思い出にふさわしい憩いの場となり、文学においても、エドワード・ヤングやトマス・グレイなど墓地派が登場する。

❹「汝の死」（The Death of the Other）：19 世紀

死とエロスの結合からエロスが抜け美だけが残り、死と死者が美化される。18 世紀に家族が愛情に基づくものに変化し、人々の死への関心が自分の死から家族の死に移り、この「汝の死」は人生最大の苦悩となる。死者の存在感が増し、喪の作業が長大となる。死への恐怖は薄れ、地獄は信じられなくなり、墓地は故人を想う場所となる。天国は家庭的なイメージに変り、人々は死後そこで家族に再会することを心待ちにした。

アリエスは「美しい死」のイギリスにおける例を、ブロンテ家の実人生と作品に見出す。長女マライアの死は姉妹に強烈な印象を与え、エミリは詩やキャサリン・アーンショーの幽霊に、シャーロットはヘレン・バーンズに、姉の姿を再現する。ヘレンやエドガー・リントンの臨終は「美しい死」を要約する。

パット・ジャランドはアリエスを批判し、19 世紀イギリスの死を「福音主義的よい死」と定義した。しかしその特徴は、アリエスの「美しい死」とよく似ている。具体的には、自宅で臨終を迎え、家族一人一人に別れを告げ、現世的・宗教的な務めを果たす時間や能力があり、最後まで意識が明瞭で、神の意志に身を委ね、過去の罪に対する赦しを乞い、痛みに勇敢に耐えるといったことである（Jalland 26）。これらの前提として、瀕死者はベッドの上に寝ている。ベッドは太古から死の場所で、人はベッドで死ぬことで儀礼的な臨終の時間を確保してきた。

19 世紀後半以降、死者への思慕は交霊術という形もとる。1870～80 年代以降、死亡率は改善するが、死は不安なものとなり、死に対する強迫観念が芸術や文学に表現される。死は徐々に美しくなくなり、福音主義が 70 年代以降勢いを失うにつれ、「福音主義的よい死」のイメージも弱まっていく。

❺「目に見えない死」（The Invisible Death）：20 世紀

死は私的なもの、隠されるべきタブーとなる。周囲は瀕死者に死ぬこと隠し、誰かが病院で死んでも誰も気づかない。瀕死者の身体は、不潔で忌まわしいものとされる。死は、心肺停止、脳死、細胞死などに細分化され、医療の停止によって生じる現象となり、瀕死者は自分の死に対する主導権を失う。

2. ヴィクトリア朝小説中の「美しい死」

以下に、ヴィクトリア朝小説における「美しい死」の例を、作家名、作品名、登場人物名の順で挙げる。

①Charles Dickens, *The Pickwick Papers* (1836-37): 29 章の‘the fairest and youngest child’

②Charles Dickens, *Nicholas Nickleby* (1838-39): Smike

③Charles Dickens, *The Old Curiosity Shop* (1840‑41): Little Nell

④Charles Dickens, *Dombey and Son* (1846-48): Little Paul

⑤Charlotte Brontë, *Jane Eyre* (1847): Helen Burns
⑥Emily Brontë, *Wuthering Heights* (1847): Edgar Linton
⑦Charlotte Brontë, *Villette* (1853): Frank; Miss Marchmont
⑧Elizabeth Gaskell, *Ruth* (1853): Ruth Hilton
⑨Charles Dickens, *A Tale of Two Cities* (1859): Sydney Carton
⑩Charles Dickens, *Great Expectations* (1860-61): Abel Magwitch

上の例からわかるのは、（1）ディケンズ小説が多いこと、（2）臨終場面で真実が明らかにされ、死の受容や神や周囲との和解が促され、「美しい死」の実現が容易となる場合が多いこと、（3）同一作品内で〈よい死〉と〈悪い死〉が対比されることがほとんどであること、である。

3. 『シルヴィアの恋人たち』、『ダニエル・デロンダ』、『ダーバヴィル家のテス』の場合

❶Elizabeth Gaskell, *Sylvia's Lovers* (1863): Philip Hepburn

18 世紀末に設定された『シルヴィアの恋人たち』は、冒頭と中間部でシルヴィアのキンレイドへの恋を 18 世紀的「エロスと死の結合」として描き、結末でフィリップの臨終を宗教色の濃い 19 世紀的「美しい死」として描く。フィリップは、再会した妻に過去の罪の赦しを乞い、祈りを捧げ、最後に奇跡的に起き上がり、天国での再会を確信し、神への信頼に満ちた状態で息を引き取る。この臨終場面により、シルヴィア個人もそれまでの不発の臨終場面や不本意な臨終場面を克服する。父・ダニエル・ロブソンの絞首刑には制度上立ち会えず、父に不利な証言をしたディック・シンプソンに赦しを乞われた時は無視をし、母が死ぬ時は自身の体調不良により集中できなかった。結末で夫フィリップの臨終に立ち会い、思う存分悲しむことで、シルヴィアはようやく「美しい死」の成立に貢献することができたのである。

❷George Eliot, *Daniel Deronda* (1876) : Ezra Mordecai Cohen

モルデカイの臨終は、「美しい死」の構成要素が揃い、宗派はユダヤ教ながら、宗教的に死に臨むという点で「福音主義的よい死」に通じる。モルデカイは 19 世紀に最も美化された病である結核で衰弱し、自分の死を察知して最愛のダニエルと妹マイラにそばにいてもらい、死後ダニエルと一体化することを心待ちにしながら、立ち上がってユダヤ教の祈りである Shema を唱え、発作もなく静かに死に移行する。モルデカイが安らかに死ねるのは、ユダヤ民族の団結と救済のために行動するという長年の夢が、ダニエルを通して成就する見込みを得たからである。彼は結核という徐々に進行する病気に罹ることで、早い段階で死を覚悟し、死ぬ準備をすることができた。その闘病期間は、いわば長い臨終でもあった。ダニエルも、マイラと結婚した上に、モルデカイと一体化することで自己強化し、東方に出発することができる。結末に置かれたモルデカイの「美しい死」は、見送る側のダニエルにとってもよいものとして、小説的解決を形成するのである。

❸Thomas Hardy, *Tess of the D'Urbervilles* (1891) : Tess Durbeyfield

結末近くのストーンヘンジでの場面が、実質的なテスの臨終場面となる。本作が展開するのは既に「美しい死」も「福音主義的よい死」も衰退しつつある時代であるが、異教的・前キリスト教的セットを選択することで、ハーディはそのエッセンスを創造的にドラマ化する。石板の〈ベッド〉に横たわるテスは、ホームにいると感じ安らぐ。幸福を十分味わってから死ねることを喜び、殺人犯に正義がなされることを受容し、妹ライザ-ルーと結婚してほしいとエンジェルに死後の希望を伝える。夫と警官たちは、瀕死者が息を引き取るのを見守るかのように、眠るテスの自然な目覚めを待つ。テスは、上半身を起こしたフィリップや椅子から立ち上がったモルデカイと同様、石板から立ち上がり、自ら前に進み出る。死刑についても、テスがかつて苦しむキジたちの首を折り安楽死させたことを思い出せば、同様に首に圧力をかけられ死ぬことは、苦しみからの解放でもある。また刑死は、〈悪い死〉の条件である不意打ちの不条理な死ではない。そしてエンジェルとライザ-ルーがテスの処刑を見届け手を取り合って去る姿は、モルデカイ同様、テスが望み通り妹とともにエンジェルとの繋がりを保つことを示唆する。これらすべてを考え合わせると、ハーディは時代的・社会的・プロット的に可能な限り「美しい死」を、ピュアなテスに用意したといえるだろう。

参考文献

アリエス、フィリップ『死と歴史　西欧中世から現代へ』伊藤晃・成瀬駒男訳、みすず書房、1983 年。
———.『死を前にした人間』成瀬駒男訳、みすず書房、1990 年。
ヴォヴェル、ミシェル『死とは何か—1300 年から現代まで』立川孝一訳、藤原書店、2019 年、上下巻。
———.『死の歴史』池上俊一訳、創元社、1996 年。
川崎明子「フィリップ・アリエスのブロンテ論」*Brontë Newsletter of Japan*. 第 94 号、日本ブロンテ協会、2017 年 4 月、p. 2.
Eliot, George. *Daniel Deronda*. Oxford UP, 2014.
Gaskell, Elizabeth. *Sylvia's Lovers*. Oxford UP, 2014.
Hardy, Thomas. *Tess of the D'Urbervilles*. Penguin, 1998.
Jalland, Pat. *Death in the Victorian Family*. Oxford UP, 1996.